

— 連載 —

美術館のある風景 (第8回)

展覧会のなりたち〈その三〉

三菱一号館美術館 館長 高橋 明也



フェリックス・ヴァロトン《赤い絨毯に横たわる裸婦》
1909年、油彩／カンヴァス、73×100cm、ジュネーヴ、
プティ・パレ美術館蔵 © Association des Amis du
Petit Palais, Genève / photo Studio Monique Bernaz,
Genève

「ヴァロトン—冷たい炎の画家」という展覧会が三菱一号館美術館で始まります（6月14日から9月23日）。スイス生まれで、19世紀末から20世紀初頭のフランスで活躍した特異な個性の画家フェリックス・ヴァロトン（1865-1925）の画業を、日本で初めてお披露目する、画期的な展覧会です。

とは言っても、その名を知る人は少ないでしょう。近代絵画史上名高いボナールやヴェイヤール、ドニ、あるいは彫刻家のマイヨールなどと親しく、世紀末の「ナビ派」（ヘブライ語で「預言者」の意）グループの一員だった彼は、北方のゲルマン的要素とラテン的造形の両方に裨差しながら、不思議で魅力ある芸術を展開していきました。しかしこの画家の作品を味わうには、展覧会に出かけて行って、実際に観ていただくしかありません。強烈な個性はストレートに観る者の心に入ってくる筈です。

今回、知っていただきたいのは、この展覧会の作り方です。通常、西洋の美術を扱う展覧会を欧米の美術館と四つに組んで仕事をすることはとても大変です。西洋美術は当然のことながら相手の土俵であり、背後に長い美術史研究の歴史と巨大なコレクションの集積をもつ欧米各国の美術館に匹敵する美術館は我が国には存在しないからです。一見華やかに見える昨今の日本の大型美術展の多くは、海外の美術館の膨大な所蔵品の中から、目玉作品少々に多数の二線級の作品を加え、かな

り高額なレンタル料を払って借りてきた「〇〇美術館展」なのです。

これは、本来西洋文化圏の国ではない日本なので、ある意味いたし方のないところでしょう。ただそれでも、「美術」を愛する人間・美術館人として私個人は、その垣根を低くしたいと考えてきました。高騰する昨今の展覧会経費には何段階もの中間マージンが含まれ、不必要に高価なビジネスを強いられる現実があるためです。

それ故、当館では「展覧会マネージャー」という職をもうけ、海外とのマネジメントをできる限り直接行うことで、それを軽減する努力をしています。欧米での展覧会事業はこれまで、作品の貸し借りを通した美術館同士・学芸員同士の相互信頼関係に支えられて発展してきました。しかしながら、今や学芸員だけではなくマネジメントの専門職が全面的に関わって支えなければ、複雑なプロジェクトは実現しません。

「ヴァロトン展」では、計画の早い段階からパリ・オルセー美術館、アムステルダム・ゴッホ美術館そして当館の3つの館の各担当者が顔を合わせ、仏語・英語で内容の検討から作品の借り出し、輸送、展示、カタログ執筆、費用負担までを分担し、共同の国際巡回展として仕上げました。国内の展覧会や欧米の美術館同士では当たり前のことかもしれませんが、私の経験でも、そうそう簡単にできるやり方でなかったのは確かです。